


博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員(主査) 井上 史雄 

論文題目 日中両語における使役表現の対照研究

ひょう ほう しゅ

氏名 馮 寶 珠

<研究の位置付け>

馮寶珠の論文は、日本語と中国語の使役表現を、対照研究の立場から扱ったものである。それぞれの言語の翻訳の用例などを採集して、帰納的に分析したもので、一言語だけの分析からは得られないような知見も得ている。従来の対照研究で不十分にしか扱われなかった現象に重点を置き、使役表現全体を展望する基盤を固めた。日中の文法対照研究に新たな踏み石を置いたとみなされる。両言語の教育にも役立つと思われる。

日本語と中国語は、言語の文法的類型論からいうと、膠着語と孤立語という違いがあり、語順も異なり、文法的カテゴリーの表示の仕方が違う。使役表現についても違いがみられ、すでにいくつかの対照研究の試みがなされている。従来、日中両語の使役表現に関しては、主として日本語の「させる」構文と中国語の“使、叫、讓”を用いる「兼語式」構文を対象として対照研究が行われてきた。代表的な先行研究として、楊凱榮の博士論文があり、日本語の使役表現に、「させる」以外に、他動詞文や、「～てもらおう」構文、「～ように言う」構文なども含めているが、実際には使役表現の典型として、日本語の「させる」構文と中国語の「兼語式」構文との対照分析を行っている。

それに対し、馮寶珠の論文では、楊凱榮の扱い残した中国語の「動補構文」に焦点をあてて、日本語との対照を目指している。中国語では動詞の後に補語を付け加えることによって、使役文をつくることがあり、輿水はこのような構造を動補連語(V-R constituent)と呼ぶが、馮は「動補構文」(V-R construction)と呼ぶ。その中で、状態補語と結果補語を持つ「動補構文」は、使役の意味を表すことが多いので、この二つの補語に焦点を絞って論じている。

<研究手法と成果>

具体的には、日本語の「させる」構文と中国語の動補構文を中心に、日中対訳の小説などの訳文を照合し、また使役表現と見られる用例を文学作品などから探して、使役表現とその周辺の用例を分類・整理した。構文と意味の面から対照分析した結果、日中両語の使役表現を、「典型的使役文」、「原因使役文」、「再帰使役文」、「物使役文」に分類している。

馮論文では、また日本語の「させる」構文と中国語の「動補構文」の翻訳を対照することにより、使役者の意志性の強弱の違いがあることも明らかにした。

<使役表現の連続性>

以上のように、実際の使用例を多量に収集し、分析してみると、日中両語とも使役を示す表現は多様で、しかも働きかけ性の大きさからいって、連続的である。馮論文では、使役表現の連続性に注目して、prototype(原型)理論を取り入れる形で考察を試みた。典型的な使役とは何かを出発点とするプロトタイプ理論を利用した対照研究は、これまで十分になされてこなかった。

日中両語の使役表現では、「親が子供を学校に行かせる」「彼は娘に料理を作らせる」などのように、使役性や意志性の強い典型的な使役文から、「彼は息を切らせながら歩いた」「彼女は脚を閉じたまま、

腰をよじらせた」などといった、自動詞文に近い、使役者の使役性や意志性があまり感じられない再帰使役文になっていく、全体としては連続体を成している。馮論文では日中両語の使役表現の連続関係を自動詞性・他動詞性の強弱の観点から見て、次のように整理する。

A	典型的自動詞文	「花瓶が壊れた」 主語が動作主格または対象格	+	-
B	再帰自動詞文	「彼が講演を聞いた時は目が輝いていた」 主語が経験者格		
C	再帰自動詞からの 再帰使役文	「彼は目を輝かせて講演を聞いた」 使役者が経験者格	自	他
D	原因使役文	「彼の言葉が子供を泣かせた」 使役者が原因格で被使役者が経験者格	動	動
E	典型的使役文	「親が子供を学校に行かせる」 使役者が動作主格で、 被使役者が動作主格または対象格	性	性
F	再帰他動詞からの 再帰使役文	「彼女は腰をひねらせた」 使役者が経験者格	強	強
G	再帰他動詞文	「彼女は腰をひねった」 主語が経験者格	弱	弱
H	典型的他動詞文	「彼は花瓶を壊した」 主語が動作主格	-	+

一言語だけの、文法形態を手がかりに整理した記述的研究からは、このような連続体について気付くことは、難しい。実際の訳文を照合するという地道な対照を踏まえた作業から生れた、新鮮な視点といえる。日本語だけの分析からは出て来にくい広い視野であり、他言語との対照研究によって、相互の関連性が浮かび出る好例である。

馮論文ではまた、過去の研究を踏まえて、日中両語における使役表現にまつわる文法的制約などのついて、共通点と相違点を検討している。文法規則の働く範囲については、言語により個別に違うこともあるが、また、人間言語の普遍性によって、共通の現象を示すこともある。文法的類型の異なる（ただし隣接による文章語レベルでの言語接触の過去を持つ）日中両語で、対照することは、興味深い。ただし、本論文では現象面での対比に終わっていて、より広い一般言語学的な普遍理論などを踏まえた議論には及んでいない。英語そのほかの研究の進んでいる言語についての成果をも踏まえて、さらに考察を深めることが期待される。

<将来の課題>

使役表現にまつわる諸問題は広範におよび、馮論文ではそのうち、ほんの一部しか扱っていない。また使役性の大小についての判断などは、分析者の直観・内省に頼るところもあり、不安を残す。さらに確認のための調査を企画すべきであろう。また中国語学のレベルからいうと、まだ高度の研究レベルに達したとは言い切れない部分が残る。今後に残された課題は多く、それは馮論文の末尾に羅列してあるとおりである。本人は、さらにこの研究を続行し推進する意志を持っており、将来の着実な成果も期待できる。

以上のように、審査にあたったもの全員が、博士号にふさわしい業績と判断した。